

氏名	タカギ マキコ 高木 麻紀子
学位の種類	博士 (美術)
学位記番号	博美第388号
学位授与年月日	平成25年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉ガストン・フェビュスの『狩猟の書』 －中世末期世俗彩飾写本の挿絵研究－

論文等審査委員

(主査)	東京芸術大学	教授 (美術学部)	田邊 幹之助
(副査)	〃	〃 ( 〃 )	越川 倫明
( 〃 )	〃	名誉教授	越 宏一
( 〃 )	〃	准教授 (美術学部)	佐藤 直樹

(論文内容の要旨)

中世の秋、西洋の王侯貴族はその権威を伸長させる一方で独自の文化を成熟させてゆくが、とりわけ狩猟は必要不可欠な嗜みとして重視性を増し、挿絵入りの狩猟概説書の成立を促した。中でも14世紀南仏の大領主フォワ伯ガストン・フェビュスが1387年から1389年に著した『狩猟の書』は、著者の直接的な経験や自然観察がテキストに反映された点で画期的であり、また、46冊もの写本が現存することがその成功を物語っている。規模の点からも中世末期の世俗写本を代表するこの作品はしかし、中世の狩猟文化に題材をとり、或いは俗語による狩猟文学の白眉とされるためか、その研究を牽引してきたのは文献学、文学史の領域であり、美術史からの研究は十分になされてきたとは言えない。

美術史家による研究は、大別して、テキストとの関連から図像を分類、分析する研究と、15世紀初頭に制作された著名な1冊(Paris, BnF, ms. fr. 616)を中心とする画家の帰属を問題とする研究がなされてきた。しかし、その一方で、写本群全体に対する研究は乏しく、網羅的に写本群を扱うコーパスも存在しない状況にあった。そこで筆者はまず、『狩猟の書』の挿絵研究の基盤を整備すべく、可能な限り写本を実見して、カタログと現段階での系統樹の作成をすることを第一課題とした。その結果、46冊の写本は、中世末期のある限定された時間と地域の中に存在し、中でも27冊の挿絵入り写本は、ほぼ15世紀フランスで制作されたことが確認された。つまり、『狩猟の書』の挿絵入り写本は、絵画芸術における大きな転換期を挟む15世紀フランス写本画の様式動向を考察するのに極めて適したマテリアルを提供していると言えるだろう。そこで本論文では、各写本の挿絵の造形分析に今一度立ち返り、15世紀フランス写本画の動向を前提とした上で、その変遷の諸相を解明することを試みた。特に注目したのは、カタログ制作を通じて判明した以下の点である。即ち、『狩猟の書』の系譜において、その図像に瞠目すべき刷新が現れたのは15世紀中葉及び第3四半期制作の写本(Paris, BnF, ms. fr. 1291; Paris, Bibliothèque Mazarine, ms. 3717)においてであるという事実であり、しかも、ここで生じた変化は以降の写本に明瞭なかたちで継承されていないと思われることである。先行研究における2写本への言及は僅かで、前者に関してはポルシェ(1955)がアンジュー公ルネ周辺の画家によるものと見做し、また、アヴリル(1993)がそれ以前の『狩猟の書』図像からの刷新に気づいたものの、その刷新がどのような原理に基づくのかは検討されていない。後者についても、図像の一部にfr. 1291写本との類縁性が指摘されてはいるが、詳細な考察は成されていない。そこで本稿では、挿絵入り写本を年代別に、初期、上述の2写本からなる中期、後期に分類し、『狩猟の書』写本の挿絵を体系的に捉えることを目指しつつ、特に中期写本で生じた変化がいかなる特質を有し、何に起因していたのかを、造形分析に重点を置いて解明することを中心

課題とした。

まず I 章で作品および先行研究を概観した後、II、III 章では、初期写本の挿絵がどのような基盤のもとに形成されていたのかを図像と様式の両側面から明らかにすることを試みた。注目したのは自然表現であり、その造形コンセプトに決定的な刺激を与えた着想源として、14世紀末にロンバルディアで制作された健康マニュアル『タクイヌム・サニターティス』の挿絵を指摘した。ここで留意すべきは、『狩猟の書』は実用書であったからこそ、直接的な自然観察の造形化が目指されたロンバルディアの新たな動向を躊躇なく取り入れることが可能だったという点である。つまり初期写本の挿絵は、テキストから自然主義的な動植物の表現が保証される故に、当時の芸術家の新たな創造の実験場のひとつとなったのである。

この考察結果を踏まえIV、V 章では、初期写本の図像が中期写本でどのように継承、変容したのかを詳細に検討した。fr. 1291写本に対しては、写本構成、テキストと図像の関係、15世紀フランス写本画の様式動向との関係、という多角的な視点から考察を行った。その結果、図像に現われた新たな変化は、注文主側からの狩猟術の書に向けられた新たな要求、それを画像へ反映すべく苦心されたテキストと図像の関係における新構想、そして、15世紀中葉のアンジェ周辺における今まさにジャン・フーケの芸術へと至る過渡期の芸術動向、これら複数の要因が交差した中心に具現化したものとして認識された。続いてms. 3717写本の図像に対しては、特にこのfr. 1291写本の図像との比較分析からその特質を探り、その結果、手本を尊重しつつも、進取果敢に同時代の絵画動向を取り込み、伝統的な図像の刷新を試みる造形志向が浮かび上がった。

以上の考察を通じ、『狩猟の書』写本の挿絵には、15世紀フランスという芸術の転換期に位置するが故の伝統と刷新が併存すること、またこの特質は一方で、実用書の図解という要請と、時代の新たな芸術動向との間の拮抗として捉える事が可能であることが明らかとなった。この二項対立の存在が、挿絵の変遷の性質を特徴づける重要な規定要因であったと考えられる。しかし、後期写本の挿絵では、中期写本に見出されたような独創的な刷新は継承されず、むしろ初期写本を踏襲することを第一義とするかのような傾向が確認される。本稿での考察結果を踏まえると、後期写本がこうした退嬰的な性質を示すのは、『狩猟の書』という媒体が、かつて初期写本がそうであったような、中世末期の芸術家に育まれつつあった外界に対する知的探究心が発揮される場としての役割を、この時代には逸していたためと言えるのではないだろうか。後期写本に質が高い一級品が欠落しているという事実は示唆的である。現実世界の自然や動物が視覚芸術において主要な表現対象として取り上げられること、それが写実的、自然主義的に造形化されること。この中世末期には未だ積極的には受け入れ難かった清新な試みが、芸術家にも受容者にとっても、今や規制から逸脱する行為でも革新的な挑戦でもなくなった時、『狩猟の書』は、初期写本、そして中期写本にもなお認められた、新たな芸術動向を映し出す鏡としての役割を終えたのである。

#### (博士論文審査結果の要旨)

本論文は、南フランスの大領主フォア伯ガストン・フェビュスが1387年から1389年の間に著した狩猟術の技術書『狩猟の書』に施された挿絵サイクルを研究対象とする。『狩猟の書』は現在、14世紀末から16世紀初頭にいたる間にフランス語圏で制作された46点の写本が知られており、うち27点に施された挿絵は、とりわけ1408～1410年頃にパリで制作された「パリ、フランス国立図書館ms. fr. 616写本」(以下616番写本)を筆頭に、豪華な装飾や豊かな自然描写によって知られている。しかしこの写本群については、これまで主として文献学や文学史の方面から研究が進められており、美術史の対象としては、各写本挿絵について個別的な言及があるものの、系統的に調査が行われたことはなかった。またそのような言及も、文化史的、社会学的な観点から行われたものが多くを占めている。本論文は、こうした研究の

状況を踏まえ、まず綿密な資料調査によって初期から後期にいたる『狩猟の書』写本挿絵のカタログ化を行い造形様式の変遷を把握した上で、代表的な作例を取り上げ、15世紀のフランス絵画史における世俗美術としての『狩猟の書』写本の意味を考察するものである。

論文は5つの章から構成される。第1章ではまず、『狩猟の書』の著者ガストン・フェビュスや写本テキストの構成と内容について概観した後、研究史の批判的な検討を行っている。すなわち(1)文化史的・社会学的研究は、今日まで一定の成果を挙げている。しかし(2)美術史領域では、挿絵の系統的研究はスケッチ的な概略を示すものに過ぎない。(3)個別的な研究は初期の写本挿絵に集中しており、中期、後期の作品に関してはほとんど触れられていない。またその問題意識は主に画家の帰属問題に向けられており、さらに、同時代のフランス絵画史を踏まえた美術史的な意味に対する考察は、曖昧なたちでしかなされていない。このような状況を踏まえ、アヴリルによる近年の実証的な研究(2006年)の成果をもとに、申請者は、現地調査を含む広範な資料収集の成果として『狩猟の書』挿絵の総合的な批判カタログを制作し(Appendix 3)、その上で新たな系統樹の提案を行っている。そしてこのカタログに基づき、現存する写本を、(1)初期写本：1380～1420年頃に制作されたグループ、(2)中期写本：1440～1470年頃に制作されたグループ、(3)後期写本：1480～1520年に制作されたグループの3つに分類し、それぞれのグループを代表する作例を取り上げて図像学的・様式的研究を進めつつ、15世紀のフランス絵画史全般に対する『狩猟の書』挿絵の意味を明らかにする、という本論文のプログラムを記している。筆者の制作したカタログは現在入手可能な挿絵すべての図版を収録した労作である。そしてこの作業を踏まえた系統樹の提案は、今後、個別作品の研究に対しても重要な基礎を構築するものであると評価されよう。

第1章で提示された『狩猟の書』全体の系統を踏まえ、申請者は第2章で、主として616番写本を取り上げ、初期写本の挿絵の成立について、そこに統合される中世の狩猟図の図像伝統について分析を行っている。すなわち中世美術の主流を成した宗教美術の主題に縛られない周縁的なモチーフとして古代からの図像を継承した狩猟図は「騎馬による狩猟」、「徒歩による狩猟」、「罾や特殊道具による狩猟」、「獲物および死体の解体」の図像に分類されるが、それらの図像タイプは14世紀以降、『モデュス王とラティオー王妃の書』のような挿絵入り狩猟マニュアルに集約される。フェビュスの『狩猟の書』初期写本は、この『モデュス王とラティオー王妃の書』挿絵を下敷きにしつつ、そこに他の図像からの借用や創造を加えて成立したという。申請者はこのような観察を通じて、これまでの研究で主流となっていた、フェビュスのテキストがいかに関像化されているかという研究の方向に対して、挿絵が独自の図像伝統を背景として制作されたことを、図像学的手法をもって明らかにしている。

続く第3章では、やはり616番写本を中心に、初期写本の様式的特質が論じられる。すなわち従来の研究で指摘されていた制作者、〈ベッドフォードの画家〉〈オテアの書簡の画家〉〈エジャートンの画家〉といった写本画家について再考を行った後、動物表現と、狩猟が行われる環境としての風景の表現が観察される。その結果、動物表現については『ベスティアリー』のような中世の教訓的な博物図の伝統を越えた、具体的な自然観察に基づく描写が認められた。また風景表現についても、14世紀絵画にしばしば見られる「段丘風景」や「綴れ織り風景」が継承されている一方で、新たな自然主義的環境描写の現れている点が指摘される。当時の定型表現を超えたこのような自然主義的側面の由来は14世紀末の北イタリアのロンバルディア地方の絵画様式に求められ、とりわけ環境表現の直接的な着想源としては、同地で制作された一種の健康マニュアル『タクイヌム・サニターティス』写本挿絵が挙げられている。申請者はロンバルディアからの影響が、アヴィニオンで制作された先行する『狩猟の書』写本を通じて616番写本に受け継がれたのではないかと推定している。そして同時代のコンベンショナルな造形を取り入れつつ新たな自然観察による描写が見られることこそ初期『狩猟の書』写本の特徴であり、そのような革新的表現の選択は、世俗の実用的なマニュアル本としての『狩猟の書』の性格自体に根ざしていると結論するのである。616番写本の造形的性質に対しては従来の研究でも断片的な言及がなされていたものの、それを『狩猟の書』自体の基本的性格と結びつけ、当時の美術史の流れの中に沿った具体的な分析

を通じて浮き彫りにした点は十分に評価されよう。

初期写本の分析を通じて明らかにされた『狩猟の書』の造形的な特質を踏まえ、次の第4章と第5章で申請者は、中期写本を取り上げる。まず第4章で考察の対象として取り上げられるのは、1445年から1450年頃にアンジュー公ルネの宮廷の周辺で発注されたと推定される写本、「パリ、フランス国立図書館ms. fr. 1291写本」(以下1291番写本)である。この写本は、これまでほとんど美術史研究の対象に取り上げられたことはなかった。申請者はまず、この写本では、初期写本の構図パターンを踏まえつつ、さらにリテラルなテキスト解釈が見られるとする。同時に動物表現では定型的な描写が影を潜め、狩猟の場面表現ではしばしば暴力的なほどのリアリズムが明らかになり、また環境表現では、1430年代にネーデルラントで生じた新たな絵画の空間表現が認められるものの、しばしば遠近法の原理からすれば混乱とも見られる描写が行われているという。同時に技法においても、鮮やかな原色を用いた初期写本とは異なって、淡彩によるスケッチ風の描写を特徴とする点を指摘する。こうした観察を踏まえて申請者は、この写本挿絵の制作者を、ネーデルラントに始まるポスト国際ゴシック様式期の新たな絵画様式を吸収し、さらにフランスにおいてこの革新運動を完成したジャン・フーケの前段階にある画家に求める。そして具体的に15世紀中葉にアンジュー周辺で活動した<ジュヴネル・デ・ジュルサンの画家>を挙げて様式比較を行い類縁性を指摘している。またスケッチ的な描法については、やはり15世紀中葉にフランスで見られた<デュッサン・コロリエ>という技法との関連を挙げている。こうした様式分析の際に申請者が注目したのは、1291番写本が、新たな遠近法表現を採用しつつ、一貫性を欠いたその描写によってある種の混乱が認められる様式段階を示す点であり、同時にそのような様式を通じて、テキストのリテラルな視覚化を求める実用書としての『狩猟の書』写本挿絵の課題が達成されているという点である。

続く第5章では、1291番写本よりおよそ20年後、フランス王ルイ11世に仕えた貴族ヌムール公ジャック・ダルマニャックの発注により1465~1470年頃に制作された『狩猟の書』写本、「パリ、マザリーヌ図書館ms. 3717番写本」(以下「マザリーヌ本」)が取り上げられる。この写本も先行研究ではごく断片的な形でしか取り上げられていないが、申請者は挿絵の量と質からして、15世紀第3四半期の『狩猟の書』を代表する作例として位置づけている。マザリーヌ本に対して申請者はまず、構図の基本的なパターンが1291番写本と、さらにより古い初期写本とを踏まえていると指摘し、『狩猟の書』写本挿絵の系譜的な一貫性を確認する。しかしそこには、当時の月暦図などにも共通するモチーフによって風俗画的なリアリズムが現れると同時に、ジャン・フーケにも比較可能な新たな空間的イリュージョンニズムの導入によって、1291番写本に見られた造形的刷新がさらに推し進められているとする。このような分析から、申請者は<ジャック・ダルマニャックの画家>とされるこの写本の逸名画家に対して、やはりフーケに写本挿絵を発注しているジャック・ダルマニャック周辺の画家たちとの比較考察を行っている。

結語として申請者は、上記のような『狩猟の書』写本挿絵の中期までの展開と変遷をまとめた後、後期の作例について手短に触れている。すなわち15世紀末以降の『狩猟の書』写本では、前期や中期の写本に見られた造形的刷新が行われなくなり、それ以前の図像を模倣するにとどまっていると指摘し、実用的専門書挿絵という性格の要請する絵画的な実験の場としての創造的な意味が、この時代になって『狩猟の書』写本から失われてしまったことを指摘して論文を結んでいるのである。

以上のように申請者の論文は、『狩猟の書』写本の発生から衰退にいたる造形的展開のプロセスを多大な資料を通じて把握すると同時に、そのコンテキストの中で代表的な作例の性格を体系的に浮き彫りにすることに成功している。同時にこの試みを通じて、従来の研究では示唆的に言及されるにとどまっていた15世紀フランス絵画史における『狩猟の書』写本の意味が具体的なかたちで示されたという点に、本論文の意義が認められよう。個々の論点、例えば1291番写本と<ジュヴネル・ド・ジュルサンの画家>との関係などの先行研究の希薄な中期写本をめぐる問題については、申請者の推論は刺激的ではあるものの、いまだに多くの解決すべき点があると思われる。とはいえ本論文は従来の研究では断片的な形でしか言及されていなかった『狩猟の書』写本を総体として考察し、この領域の研究の基礎を据えた労作

であるという点において、過程博士論文にふさわしい内容を備えた論考と判断される。